

氏 名 (本 籍) ^た田 ^{なか}中 ^{さとし}敏 (新潟県)

学 位 の 種 類 学 術 博 士

学 位 記 番 号 博 乙 第 442 号

学 位 授 与 年 月 日 昭和63年 3 月 25 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 5 条第 2 項該当

審 査 研 究 科 心理学研究科

学 位 論 文 題 目 スピーチの生産過程における音声と意味の関係

主 査 筑波大学教授 教育学博士 福 沢 周 亮

副 査 筑波大学教授 教育学博士 杉 原 一 昭

副 査 筑波大学助教授 教育学博士 太 田 信 夫

副 査 筑波大学教授 教育学博士 内 須 川 洸

副 査 筑波大学教授 教育学博士 市 村 操 一

副 査 筑波大学助教授 川 合 治 男

論 文 の 要 旨

(1) 本論文の構成

本論文は、6 章、本文149頁、引用文献等19頁、図表58葉より成っている。

(2) 本論文の目的

本論文は、言語の音声と意味との関係を明らかにしようとするものであるが、いわゆる psycholinguistics が提出しているスピーチの生産過程についてのモデルへの批判を基盤としており、いくつか提出されているモデルのいずれもが「音声化」に意味の処理を結びつけていないとして、その反証を求めようとするものである。そのため、音声を伴うスピーチの生産過程と意味の処理過程を対象とすることにより、両者が分離不可能な関係にあることを実証しようとした。

(3) 研究の方法と結果

1 音声を伴うスピーチに発生する停滞現象の検討 (実験 1 ～ 3)

成人を対象に、音声を伴うスピーチに発生する停滞現象を取り上げ、以下の検討が行われた。

実験 1 では、スピーチの資料を採集するために以下の実験で用いることになる絵画記述課題の妥当性の検討が行われ、絵画記述課題によって採集されるスピーチの資料のなかの停滞現象は、対人伝達の要因によって変動しないという保障を得ることができた。従って、採集した資料の分析に当たっては、対人伝達上の考察を最小限にとどめ、意味処理上の考察に集中することが可能と考えら

れた。

実験2では、絵画記述課題によるスピーチの資料の採集が行われ、そのなかに発生する停滞現象の分析が行われた。その結果、停滞現象のいくつかのタイプが確認され、それらが異なる発生の仕方を示すことが明らかにされた。

実験3では、言い直しや休止が発生する際の、スピーチの停滞中の内的過程を、内省により話し手となった被験者自身に報告させた結果、音声を生産することによって、被験者が意味の微妙なニュアンスを問題とし、停滞するという事例を、いくつか見いだした。

以上から、音声を伴うスピーチの生産が意味の処理過程と密接に関係しているという可能性、更には、音声を伴うスピーチは音声を伴わない段階のスピーチよりも意味の分化が進んでいるという示唆を得ることかできた。

2 幼児・児童のスピーチに特有な停滞現象の検討（実験4～7）

幼児・児童を対象に、そのスピーチに特有な停滞現象（添音・強調）が取り上げられ、以下の検討が行われた。

実験4では、3つの地域、5つの学年（幼稚園年中児から小学校3年生まで）を対象として実験的に資料の採集が行われた結果、添音・強調が汎地域的な現象であり、発達上、交代する傾向（添音が減少し、強調が増加する）にあたることが見いだされた。

実験5では、添音と強調の発達の交代の理由および両者が交代しながらも停滞現象としてスピーチのなかに発生する理由を明らかにすることを目的として、スピーチの場面の公式性と課題の困難度を条件に、小学校1年生・4年生を対象としてスピーチの採集が行われた。その結果、添音・強調の発生率は前者の条件に関係すること、つまり両現象の交代は場面の公式性に依存することが明らかにされた。

実験6では、実験5を反省して、とくに添音を取り上げられ、小学校1年生を対象に、被験者がスピーチの生産を行う時、実際に手がかりを適切に利用し困難を軽減できるような試行の反復が行われた。その結果、試行の反復につれて、スピーチの生産の手がかりが有る条件では添音の発生率が減少すること、生産の手がかりが無い条件では、ほとんど1回めの試行と変らない発生率が維持されることが認められ、添音がスピーチの生産過程下の意味処理の困難度に関係して発生することが確認された。

実験7では、小学校1年生を対象に、同一の絵画に対して、階層構造をもつスピーチと並列配置のスピーチを行う条件が設けられて、それぞれのスピーチに発生する添音を取り上げられた。その結果、意味の処理が困難であると考えられる階層構造をもつスピーチの際に添音の発生が優勢であること、しかも、その発生の仕方はスピーチの階層構造に依存していることが認められた。従って、添音は階層構造に基づく意味の処理が行われている時に、その処理のステップの個々の条件に応じて発生すると考えられた。

以上から、幼児・児童においても、成人と同様、停滞現象（添音・強調）があること、とくに取上げた添音の発生の特徴は、スピーチの生産過程における意味の処理に関連していることが認め

られた。

3 幼児における音声を伴うスピーチと音声を伴わないスピーチの比較検討 (実験8・9)

スピーチの音声を、直接、意味の処理に結びつけて、意味処理の向上が見られるか否かを実験的に確かめる検討が、幼児を対象として、以下で行われた。

実験8は、音読は言語材料の音韻処理につながり、黙読は言語材料の意味処理につながるとする符号化理論に基づく内田(1975)の実験結果を批判する形で行われた。幼児を対象に、有意味な単語と無意味な単語および音読と黙読を組み合わせた再生実験が行われた結果、効果は「音読＝黙読」で、符号化理論による実験に疑問が提出された。

実験9では、幼児の物語理解における音読と黙読の比較が、11個の文よりなる物語と「音読」「ツブヤキ(音読の一種)」「黙読」の条件を組み合わせで行われた。その結果、生態的妥当性を考慮して導入された「ツブヤキ」条件は、相対的な意味で幼児にとって不自然な音声を伴うと考えられる「音読」条件よりも、また音声を伴わないスピーチによる「黙読」条件よりも、意味の処理をいっそう促進することが認められた。

以上から、発達の上では、「音読>黙読」という関係の先行することが認められた。

4 成人における音声を伴うスピーチと音声を伴わないスピーチの比較検討 (実験10～12)

実験8・9の延長線上に位置するもので、同様の主旨をもつ検討が、発達上の完成期にある成人を対象として行われた。

実験10では、意味の処理の困難度をかなりあげた文章が使われ、コンピュータによる一人学習場面のなかに音読と黙読の条件がもちこまれた。その結果、音読と黙読の理解の指標にはほとんど差が表われないことが認められ、仮りに音読において音声が意味処理に有利に働くとしても、黙読においても音声に代るなにかがあるのではないかと考えられた。

実験11では、実験10での考察の結果、音声に代るなにかとして文字列が想定されたため、材料である文章の文字列を「ひらがなのみ、読点ぬき」の条件にし、被験者の試行手順を「事前テストー文章の読み聞かせー文章の読みー数字の読み上げー理解テスト」にして、実験が行われた。その結果、有意差は認められなかったが、数値のうえで音読は黙読よりすぐれた理解得点をあげていることが認められた。

実験12は、実験11から試行手順のなかの「文章の読み聞かせ」の条件を省く形で行われた。理解テストについて音読群と黙読群を比較した結果、後者より前者が有意にすぐれていることが認められた。

以上から、材料である文章のもつ有意味性が落ちるにしたがって、音読の成績の向上が認められ、スピーチの生産過程における意味と音声との分離には妥当性のないことが認められた。

5 まとめ

以上の知見に基づいて、スピーチの生産過程を意味の処理過程そのものとみなすことができるよ

うに、従来のモデルが修正された。

審 査 の 要 旨

本研究は、スピーチの生産過程における「音声化」が意味を処理しないとする従来の psycholinguistics のモデルに疑問をいただき、それに対する反証を求めたものであるが、結果は、反証を提出すると共に、スピーチの生産過程を意味の処理過程そのものとみなすことができるというモデルを提出することになり、この領域の研究を一歩進めることになった。これは、大きな成果として高く評価できる点である。とくに、よく練られた調査・実験によって、この成果をあげた点に大きな意義が認められる。

ただ、一方では、使われている用語の定義については更に検討の余地が認められること、この成果の一般化は慎重でなければならないと認められることなど、問題とすべき点もあげられる。

しかし、言語に関する大きな主題を心理学的に取り上げて上記の成果をあげたことの意義は大きく、すぐれた研究と認められる。

よって、著者は学術博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。